



## 初めに

---

この作品は子供を寝かしつける為に夜な夜な話して  
聴かせたお話が元になっています。  
もっとも話の成立する途中から絵本にすることを考えつつ  
繰り返していたのですが。

紙の束としての本それ自体が好きな僕としては  
“視覚だけではなく指先も刺激する仕掛け絵本のような  
楽しさは電子書籍では味わえまい？”  
と思います ...と言いつつ、ネットで公開しているのですが。

この作品は今まで一番めくる仕掛けを使いました。  
ネットでの再現はもちろん不可能ですが、気分だけでも  
味わっていただけたらと思います。

※  
制作当初のタイトルは『どんぐりのはなし』であり、HPでも  
そのタイトルで公開しています。

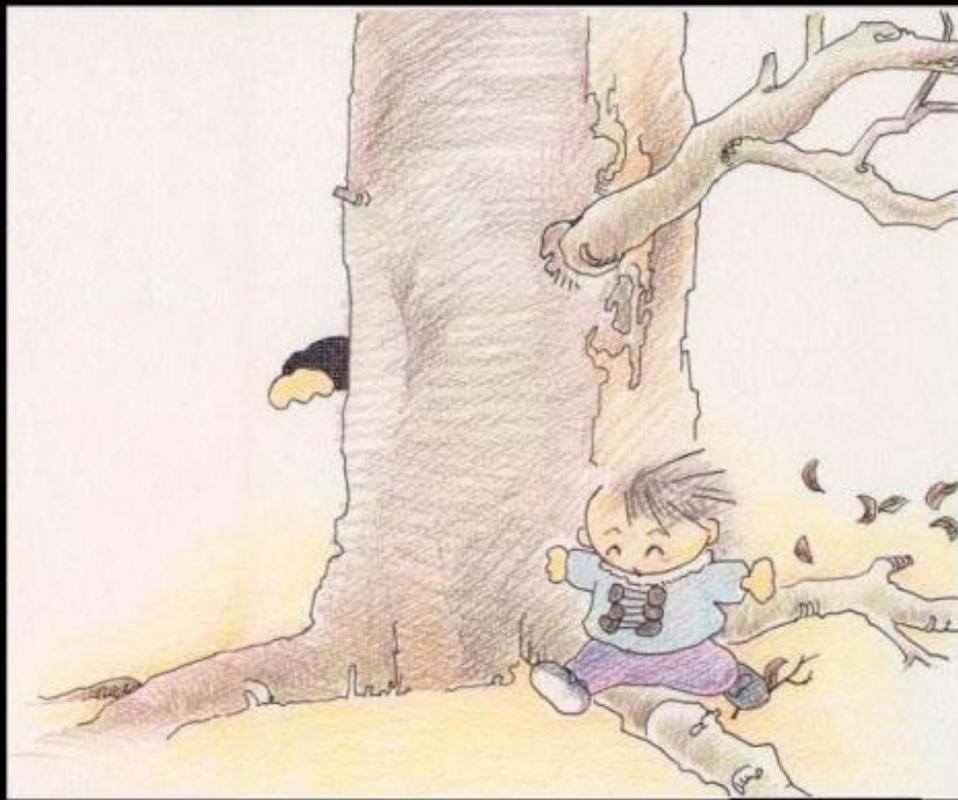


どんぐりのぼんし

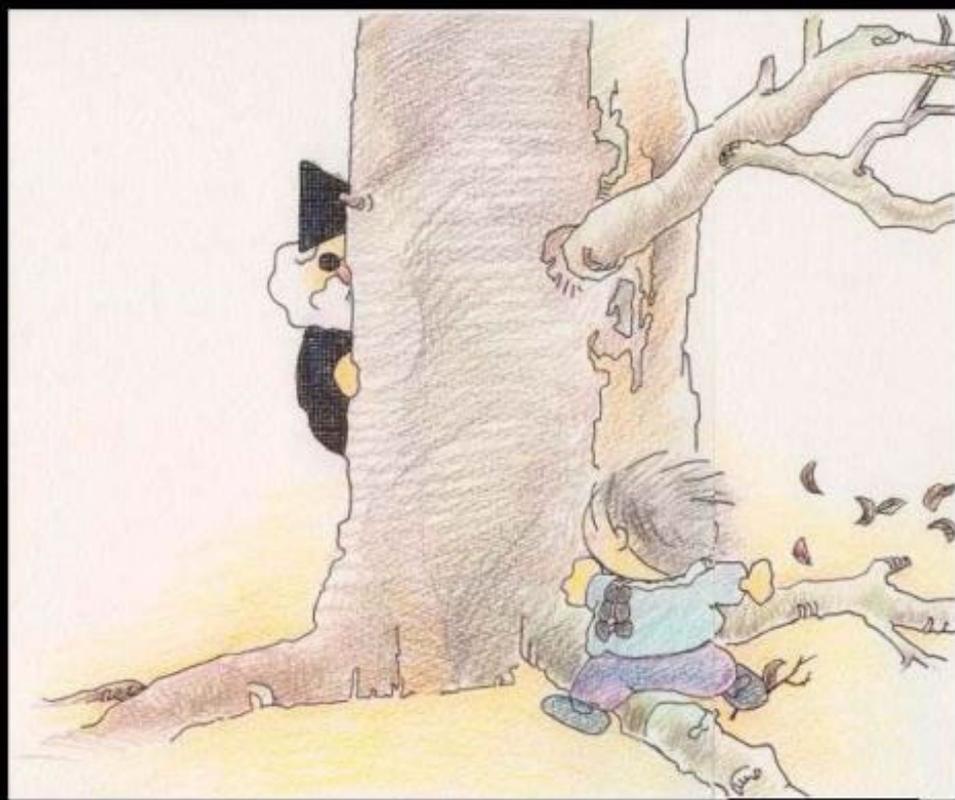
**ガサガサガサガサ** ある冬の晴れた日、  
Qちゃんが森に遊びに来ました。  
**パキパキガサガサ** 落ち葉や枯れ枝を踏むと  
いろいろな音がして楽しいです。  
**カサカサカサカサ** 向こうではリスさんが  
お散歩中。コンニチワって手を振りました。

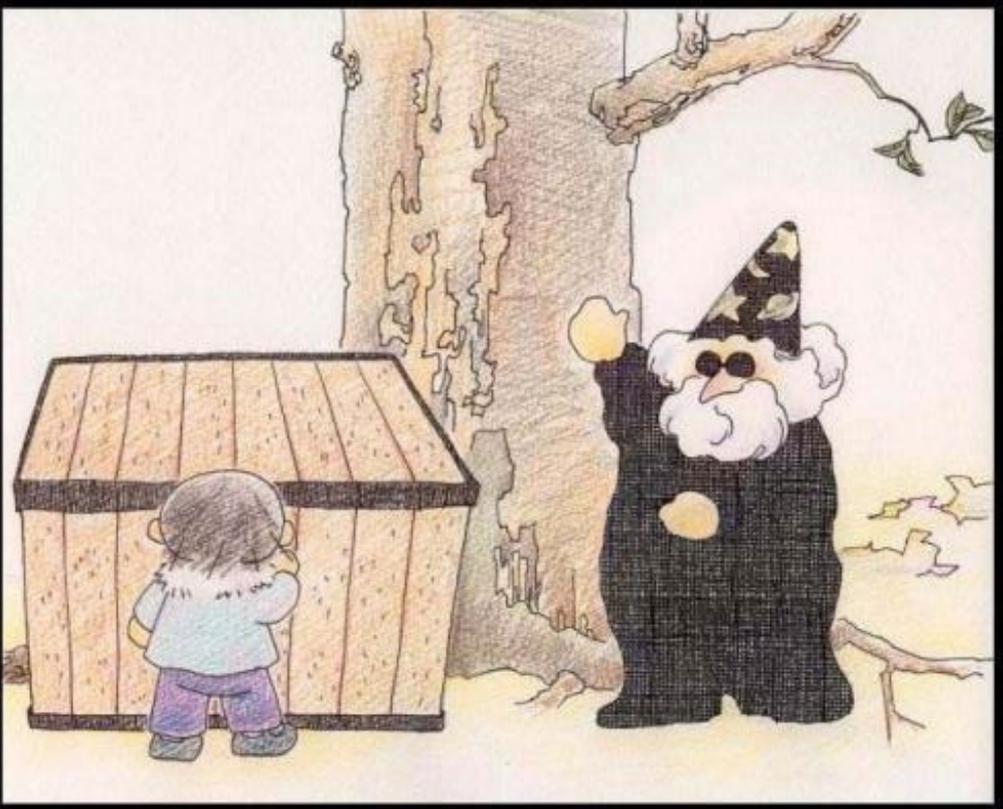


更に森の奥へ行くこうとすると、声をかけてきた  
人が居ます。  
「もしもし、お譲ちゃん可愛いから帽子をあげち  
ゃおうかな」

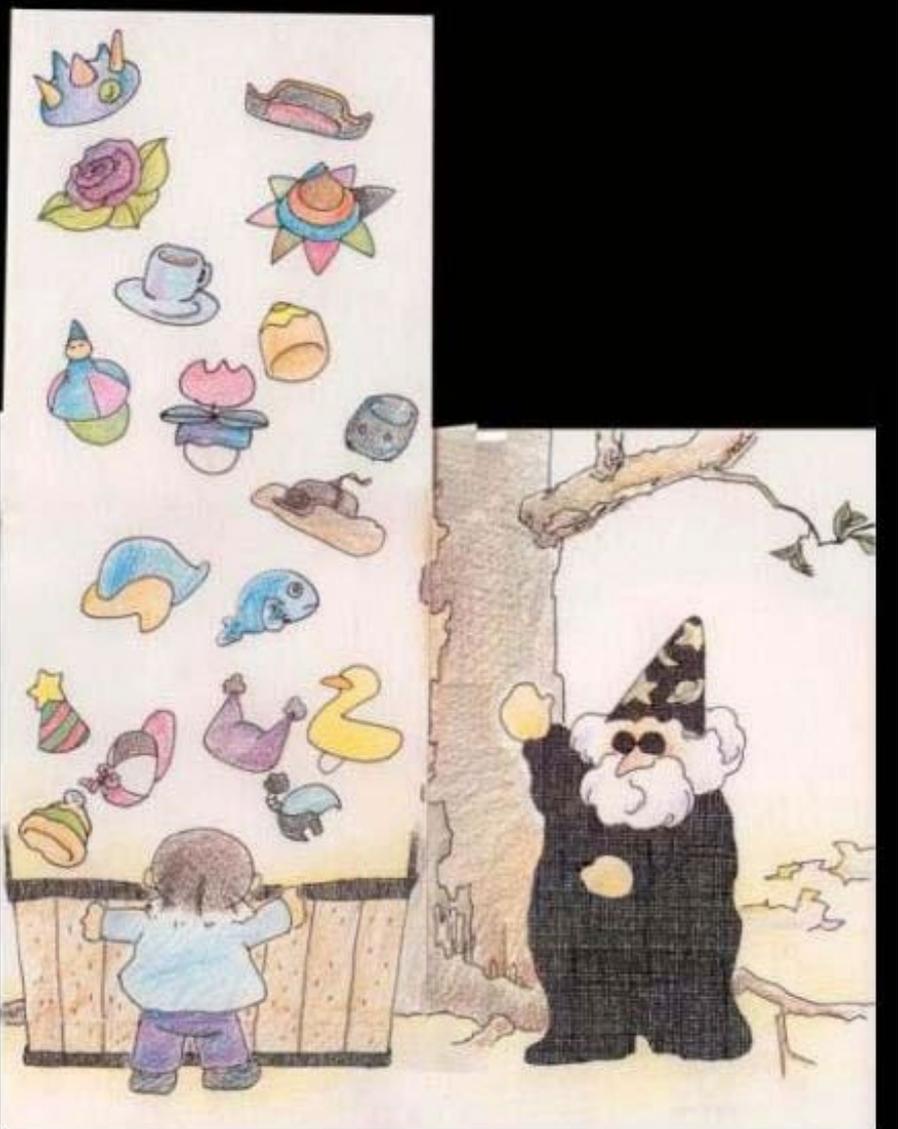


振り返ってみてみると、木の陰から手招き  
しているのは、ちょっと不思議な格好をした  
オジサンでした。  
「オジサンはだあれ？」





「オジサンはね、森の帽子屋さん。  
可愛い子には帽子をひとつプレゼント  
しているんだよ。  
さあ君も一つ選んでごらん」



そう言いながら横に置いてある  
大きな箱のふたを開けると、  
中からは見たことも無いような  
沢山の帽子が出て来ました。

「わぁこんなに沢山！迷っちゃうなぁ」  
そう言いながらQちゃんが選んだのは地味な  
緑色の帽子でした。

「少しが良いなーだってどんぐりの帽子にぞっく  
りなんだもん。」

「アタシどんぐり大好き」

そしてオジサンにお礼を言いながら帽子を  
かぶったQちゃんですが

**ドクーン**

どうしたことが尻もちをついてしまいました。





あいたたたた、いったいどうしちゃったのか  
しらん？」

そう言いながら辺りを見回すと先ほどまでとな  
りか様子が違います。それに今まで聞こえてい  
なかった沢山の話し声が聞こえて来ました。

「あ、新しい子が落ちて来たぞ！」

「遊ぼうって誘ってみようか？」

「うん、きっと友達になれるよ！」

声のした方を見てQちゃんはビックリしてしま  
いました。

「わぁーどんぐりに囲まれてるー！」

それを聞いてきょとんとしていたどんぐりたち  
でしたが、すぐにみんな大笑いを始めました。

「なにを言ってるんだよ、自分だってどんぐりの  
くせに！」

「え？変なのはそっちよ、アタシは人間の女の子だもん」

そう言いつつも不安になったOちゃんは、水たまりに映った自分の姿を見てまたビクビクしてしまいました。

「わぁーアタシ、ぜんぜんになっぺなっぺ」



「そうだよ、同じぜんぜんじゃないか」

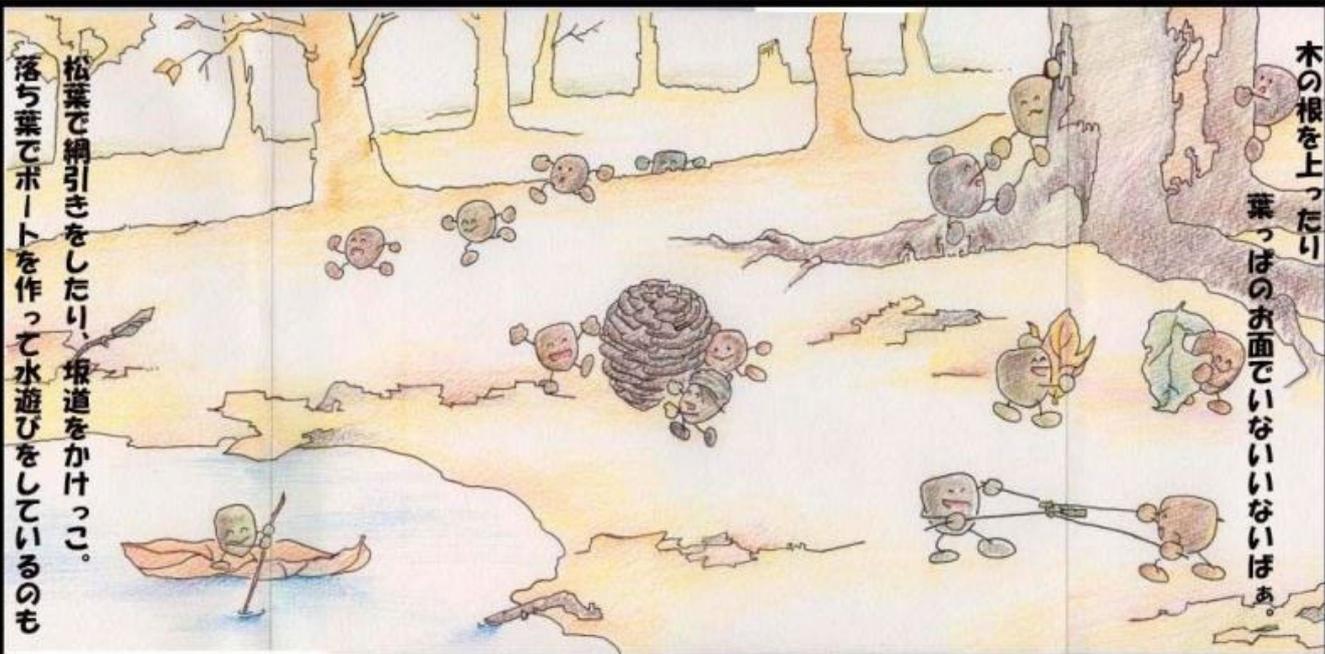
「わぁー一緒に遊ぼうっ」

そう誘われてOちゃんも「一緒に遊ぶことにしました」。

森でのごんぐりたちの遊びはいろいろ。

木の根を上ったり

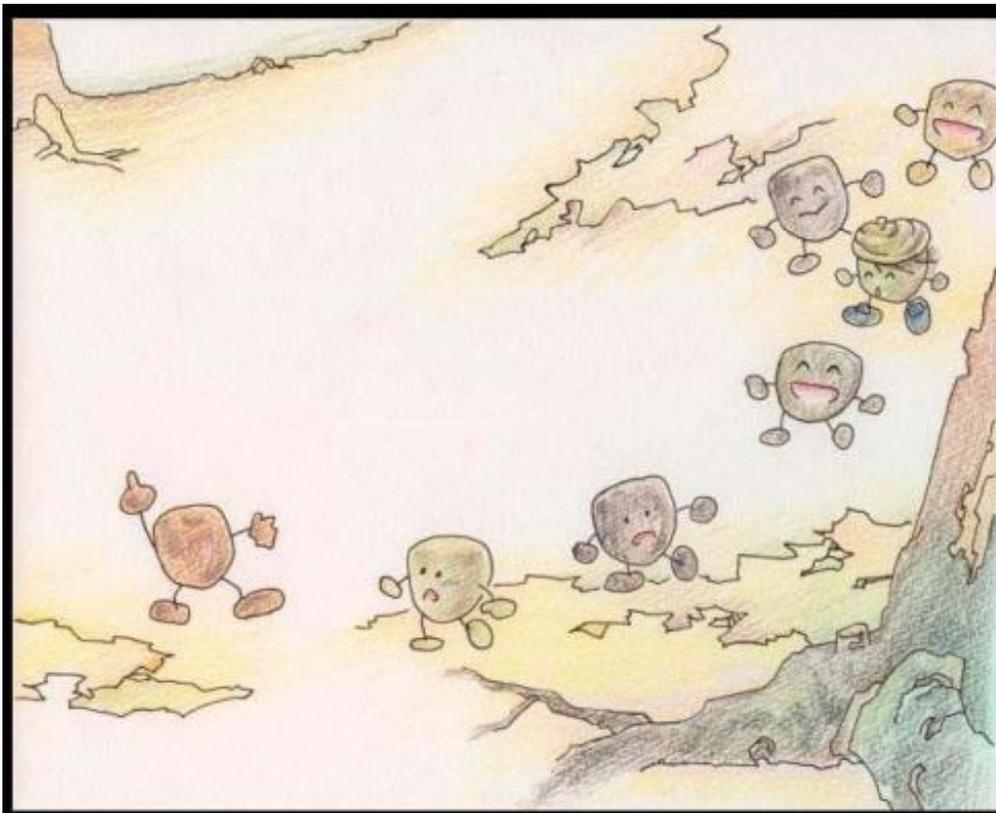
葉っぱのお面でいよいよいよいよあ。



松葉で綱引きをしたり、坂道をかけっこ。

落ち葉でボートを作って水遊びをしているのも

居ます。

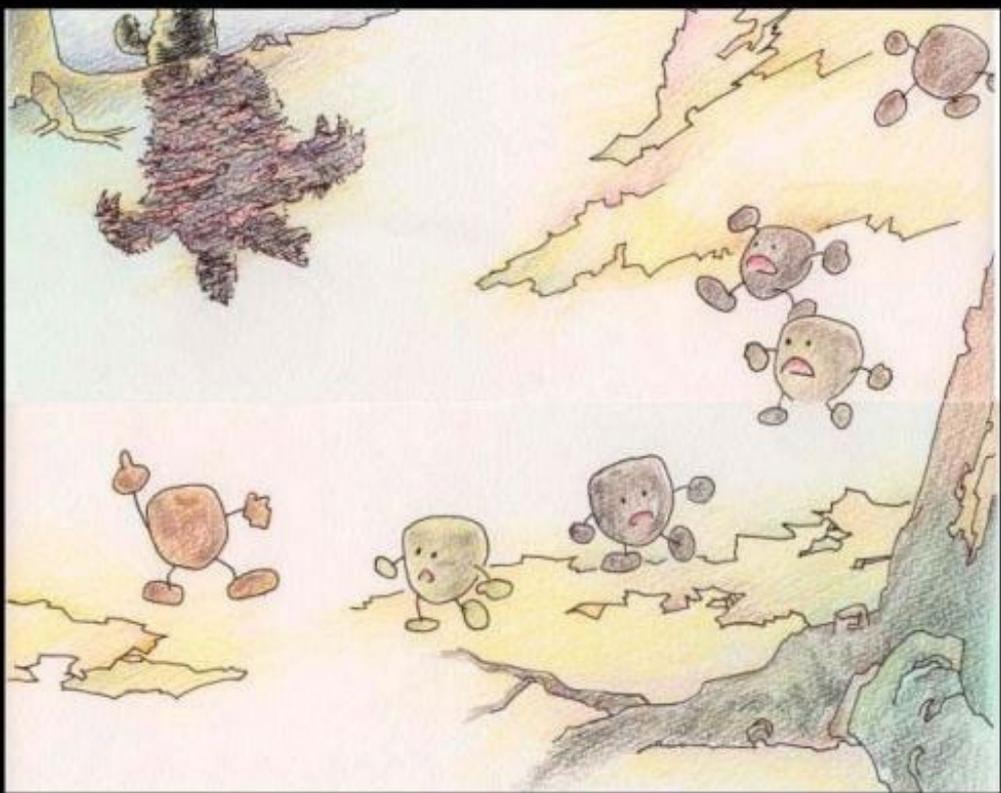


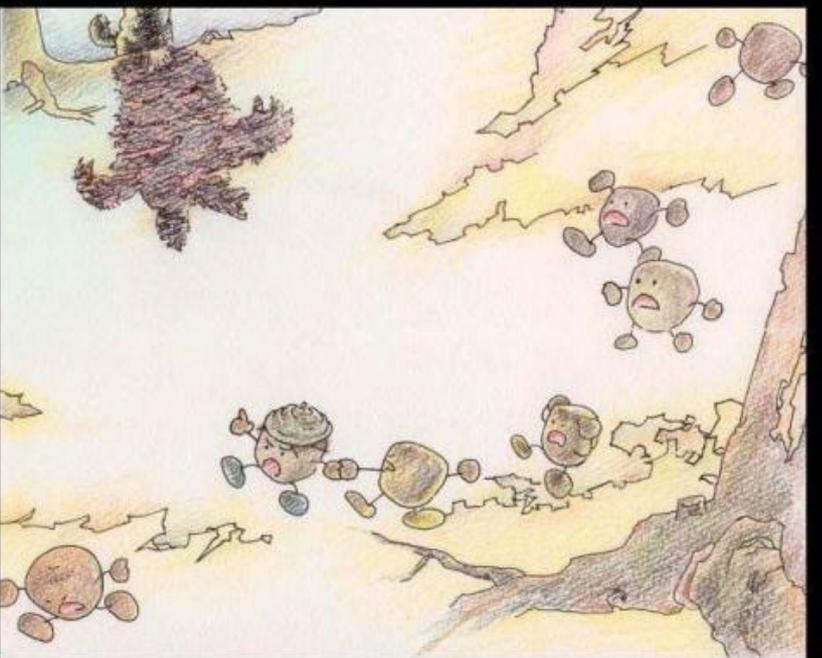
「ああ面白い、今度はなにをして遊ぶの？」  
そう話しながら歩いてしていると突然、前を歩く  
どんぐりんが叫びました。  
「アイツだ！みんな逃げて！」

「アイツって？」

Qちゃんが指さされた方を見てみると、

そこには大きな黒い影が…。





「なにア！怪獣？」

「違うよ、リスだよ！早く逃げないと食べられちゃうぞ」

「そんなあ、リスはもっと小さくて可愛い善なのに…」

「いいえ、それは人間にとっての話。」

「どんぐりたちにとってリスは怪獣、

それも怖い怖い怪獣なんです。」

「その証拠にほう…」

「ぐふふふ、美味しそうなどんぐりを

見付けたぞあ〜！

「どれから食べてやろうかなあ」

「きゃあー！逃げろおー」

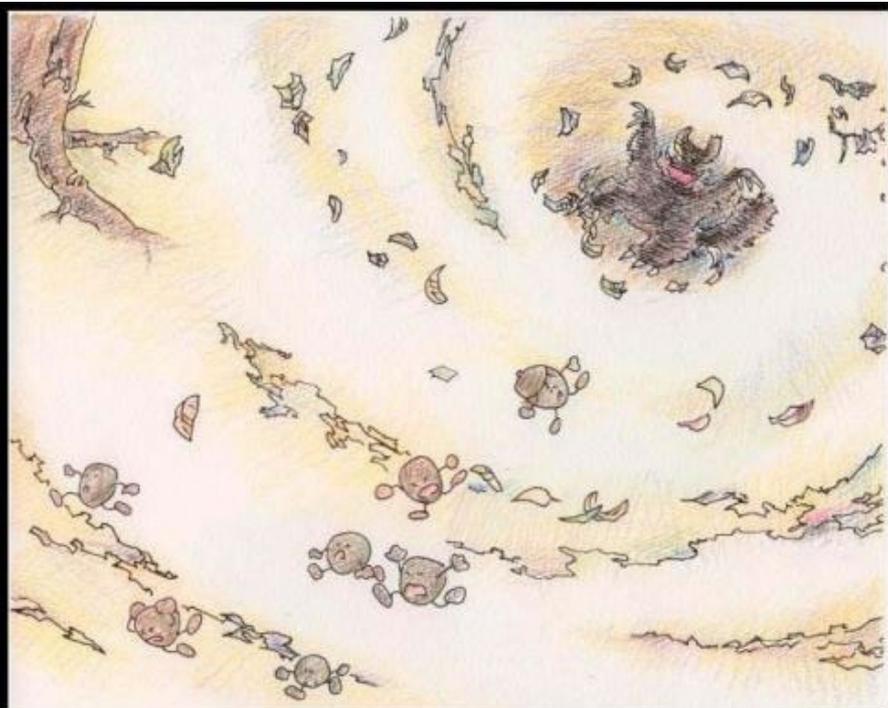
慌てて逃げようとするどんぐりたちですが、とてもリスにはかないません。

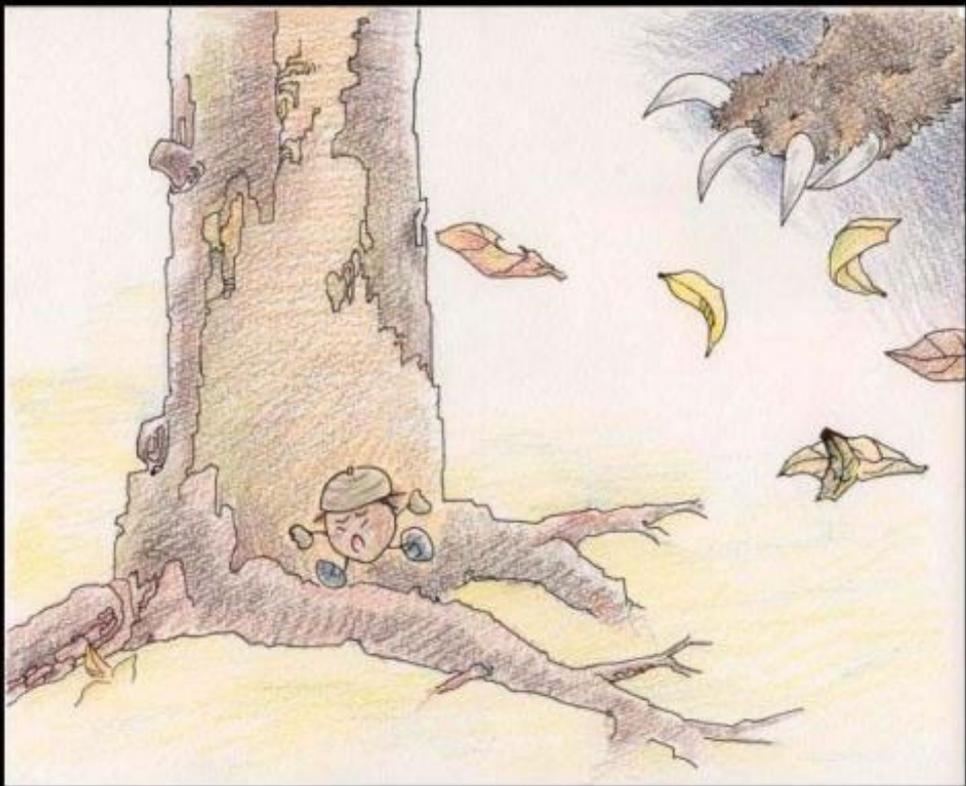
なにしろリスはどんぐりたちより遥かに大きくて、足が速いんですから。

「ぐぶぐぶ、待て待て待てまゝとれから食入てやろうかなあ」

丸いのが良いかな、それとも長いのかな？よし帽子をかぶっているのからにしよう」

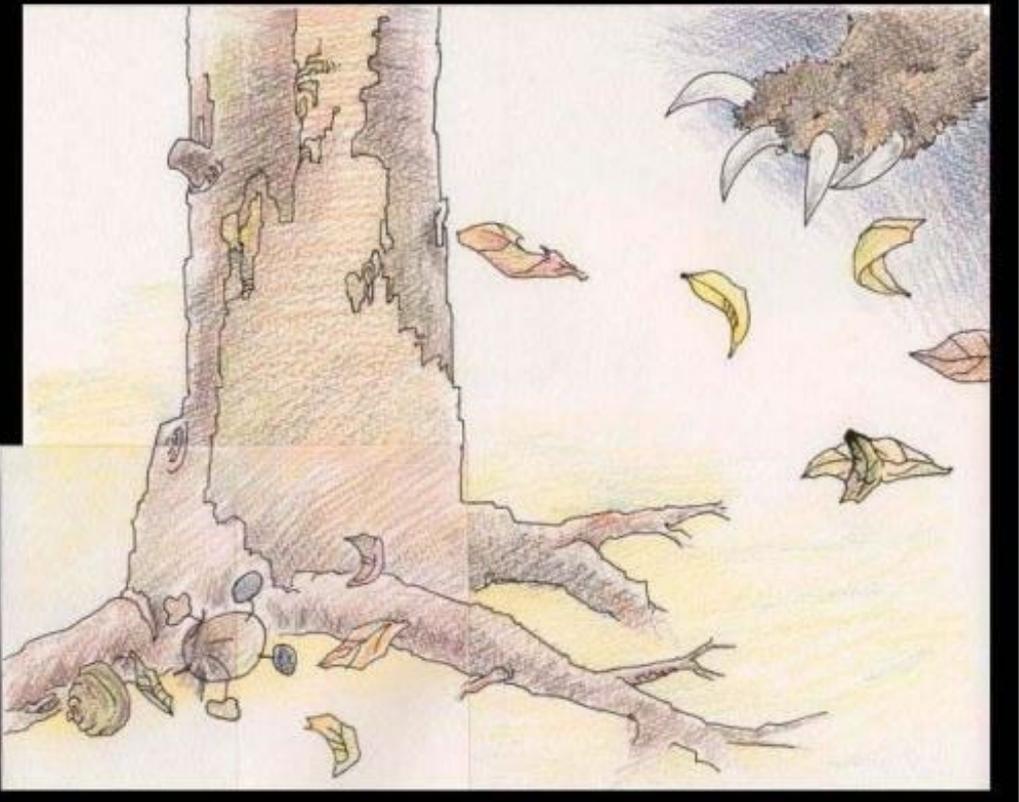
「きゃあー！」





必死で逃げるQちゃんたちですが、**ガサガサガサ**  
リスの足にはかないそうもありません。

「ほらほらほらあ、食べちゃうぞおおおお」  
長い爪をはやしたリスの恐ろしい前足が、  
今にもQちゃんの背中に届きそうになった  
その時…



ゴキブリ

ズーンノロノロ...

木の根につまづいて転んでしまいました。

「せつたメ、食べられちゃうー」

**カサカサ、カサカサカサ…**

どうしたことでしょう、リスは小さくなって  
遠くに逃げて行きます。

「あれ、アタシ助かったんだ？」

そう、転んだ拍子にQちゃんは帽子が脱げて  
元の人間の女の子に戻っていたのです。

「ああ良かった…でもどんぐりたちは大丈夫だっ  
たかしら？」

大丈夫。

転んだQちゃんのお腹の下に隠れて、みんな  
無事でした。





「ああ良かった、みんな今日はおウチにいらっし  
ゃい」

Qちゃんはポケットにどんぐりたちを入れて  
おウチに帰ることにしました。

「この話、お母さんは信じてくれるかしら？」

おしまい



モリカズ絵本『不思議な森の帽子屋さん』

<http://p.booklog.jp/book/36240>

著者：イイダモリカズ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/morikazuiida/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/36240>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/36240>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.